

方丈記 第十三回

また、庵のある山のもとの方に一軒の、柴でつくった庵がある。そこには、この山の山守が住んでいて、小さな子どももいる。私の庵にもときどき遊びに来て、特にすることなど無くて、ひまな時には、その子とを友だちにして遊んだりもする。

その子は十歳で私は六十。歳はずいぶんと離れているけれども、その子と遊べば、互いに同じように楽しんで、年の差などというものはありません。食用にもできる芽花を摘んだり、小さくて白い実を付ける岩梨や、山芋の実である零余子むかごを採ったり、芹を摘んだりもする。また山裾の田んぼに行き、いっしょに落ち穂を拾い、それを組み合わせ、いろんなものをつくったりもする。

天気の良い日には、峰に登り、遙かなたの、故郷の京の方を望み見れば、小幡山こばたやまや伏見ふしみの里や、鳥羽とばや、羽束師はつかしなどが見える。そうして美しく見える景勝地というものには、それを所有する人などいないので、いくらそれを見て楽しんだところで、都合などあるわけもなく、咎められる筋合いもない。

歩くことが煩わしく感じられずに、なんとなく遠くにまで行きたいなど思うような時には、峰伝いに、東の方の炭山すみやまを越え、笠取かさどりも過ぎて、石間いわまの寺に詣でて、石山を拝んだりすることもある。またある時には、栗津あわづの原に分け入って、蟬歌せみうたの翁おきなの遺跡を訪れたり、田上河たなかみがわを渡って、猿丸大夫さるまるもろちきみの墓を訪ねたりする。その帰りには、桜狩りでもと思って桜の花を愛でたり、紅葉もみじを求めて山に分け入ったり、蕨わびを摘んだり、木の実を拾ったりなどして、家に戻れば、それらを仏壇に供え、また日々の暮らしに用立てたりもする。